

『正しい行い』 ヤコブの手紙 4 章 1～6 節

1. 正しい行いとは

ヤコブ書 4 章は、「正しい行い」とはどんなものを教えています。「正しい行い」とは、何よりも「謙遜に求める」ことです。逆に言うと「悪い行い」とは、「**自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求める**」ことです。快樂を追求する生き方は「**世を愛すること**」であり、「**神に敵対すること**」なのです。神は「**私たちのうちに住ませた御霊**」のゆえに、私たちを「**ねたむほどに慕っておられ**」ます。自分の罪を悲しみながらも、その愛の神に近づいて求めることが、「正しい行い」ができるための秘訣です。「**神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。**」という重要な真理を常に心に覚えて歩んで行くなら、これ以降の二つの命令も難なく実行できるようになるでしょう。

2. 争い事の理由

行いの伴った生きた信仰について語ったヤコブは、その具体的な例として 3 章で舌を制御することについて述べました。舌は少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。これを制御することは誰にもできませんが、それは心にあることを話すので、そのためには、いつも心が神の平和で満たされていなければなりません。

それでは、どうして私たちの間に戦いや争いがあるのでしょうか。それは外側の問題ではなく、内側の問題です。1 節に「**あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。**」とあります。ですから、私たちは私たちの心をしっかりと見張っていなければなりません。いつも神に従い、神の平和と神の知恵に満たされていなければならないのです。

この「**あなたがた**」とは、この手紙の受取人であったユダヤ人キリスト者のことを指しています。これは教会の外での争いのことではなく、教会の中での、キリスト者の間にあった争いのことなのです。彼らはイエス様を信じて救われていました。なのに、そうした彼らの間にも戦いや争いがあったのです。信仰を持ったら争いが無くなるのかということそうではなく、人が集まるところにはどこでも争いが起こるのです。いったい何が原因でこうした戦いや争いが起こるのでしょうか。落ち着いて考えてみれば、それは、人間としての未熟さというべきものでしょう。人間として、お互いに自己主張するのみで、譲ることがない、自分の中にある欲望を治めることを知らないからです。ヤコブは、2 節で「**あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入ることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。**」と言っています。しかし、世の中の人々ならわかりますが、キリスト者はそういうことはないと思うかもしれません。

キリスト者は、イエス様を信じて新しく生まれ変わった者であり、キリストのために生きていきたいと願っている者であり、そうした欲にも勝利しているのではありませんか。確かに、キリスト者はイエス様を信じた時、聖霊によって新しく生まれ変えられました。古い自分はキリストとともに十字架につけられたのです。私が今この世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。しかし、その一方で、まだ肉の性質が残っているのです。肉というのは自分のことです。自分の思いのままに生きていきたい、自分が願うように、自分の満足のために、自分の喜びのために、自分の、自分のという思い、それが肉の思いです。そうした肉の性質が残っているため、欲に引かれて、おびき寄せられ、誘惑されるのです。

なぜ争いが起こるのでしょうか。自分はこうしたいと思っているのに、相手はそうではないからです。自分の思いや利益と相手の思いや利益が一致しないからです。一致していればこうした問題は起こりません。しかし、誰の利益ともぶつからない欲望などはありません。自分は、自分はという自分の思いが強ければ強いほど、自分の中に戦いや葛藤が生じてくるのです。そしてそれが戦いや争いとなって外側に現れてくるのです。これはキリスト者であってもノンクリスチャンであっても同じです。確かにキリスト者であるなら、自分というのは十字架に付けられたので死んでいるはずですから、本当に死んでいれば自分ではなく御霊が支配しているのでその傾向は少ないはずですが、御霊によってではなく肉によって歩むならノンクリスチャンと全く変わらない生き方になってしまうのです。ですから、重要なのは、どう

したらこうした戦いや争いを解決することができるかということです。というのは、キリストを信じて救われたキリスト者が互いに争ったり、戦ったりするのは、神の御心ではないからです。神の御心は、私たちが互いに愛し合うことです。ですから私たちは、私たちのからだの中で戦うこの欲望に対して、どうしたら対処することができるのかを学ばなければなりません。教会の抱えるこの問題の原因のひとつとしてヤコブは、人間の自己中心さを挙げています。ここで言う「自己中心」とは、人が自分に利益をもたらすことばかりを追い求め、教会にとって有益なことには見向きもしないことです。他の人をねたむ心は、多くの人間の抱えている問題であるとも言われます。

「ねたみ」とは、自分も何かしらは得ているということでは満足できず、他の人と比べると自分だってもっともらえるはずなのにそうっていない不満を訴える心のことです。私たちは他の人がいい生活をしているのを見ると、自分もそういう生活をしてみたいと思ってもできないと、急にひがんでみたり、妬んだりするようになります。すると不思議なことに、そういう人を見ると嫌な気持ちになったり、敵対心を抱くようになったりするのです。やがて、その人がいないところで悪口を言ってみたり、噂話をして、その人の評判を落とそうとすることさえあります。つまり、そうした自分の中で戦う欲望が外側に表れて、それが争いや戦いになるのです。

3. 神に願い求める

いったいどうしたらこの問題を克服することができるのでしょうか。2節後半から3節に「**自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。**」とあります。ヤコブはここで、あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからだと言っています。何かをほしいと思い、うらやむのは、その根底に自分があって、自分でそれを手に入れようという思いがあるからです。そこには、「神」は存在していません。したがって、祈ることもないわけです。けれども、神は惜しみなく与えてくださる方です。ですから何かを願うなら、それを神に願い求めなければなりません。神に願って、神に祈って、神により頼むなら、神が与えてくださいます。あなたがたのからだの中で戦う欲望の解決は、まずあなたが神に向かい、神に祈り、神にすべてをゆだねることから始まります。

「いや、神に祈ったって、そんなに簡単に与えられない」と言う人もいるでしょう。それに対してヤコブは、3節で「**求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。**」と言います。欲しいと思った事柄について、よくよく考えると、それは自分の欲を満たすためなのです。皆のためにといいながら、そこにはちゃんと自分が得する何かがあったりするものです。そのようなあなたは、世を愛しているのであって、神を愛しているのではない。いや、ひょっとして神の敵になっているのではありませんか、とヤコブは言います。確かに、関心は自分のこと、自分を富ませること以外の何物でもないとしたら、ある意味で悪魔的です。知らずに神の敵になっているようなものでしょう。

この節でヤコブは、神からの答えをいただけない祈りもあるというテーマを扱っています。イエス様がマタイの福音書7章7～8節で「**求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。**」と教えましたが、この背景にあるのはこの言葉だと思われます。

神はすべての祈りに答えてくださるはずではないのでしょうか。祈り求める者たちが、望み通りの祈りの答えを得るとはかぎらないのはいったいどうしてなのでしょう。イエス様が、ルカの福音書11章9～13節で「**ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。**」と教えています。そもそも「祈り」とは、祈る者自身の欲求や快樂を追求するための手段ではありません。真の祈りには常に「イエス様、あなたの御心がなりますように」という祈りが含まれています。動機が間違っていれば聞かれません。神は私たちの必要を

満たしていただきますが、私たちの欲しいものを与えるわけではありません。というのは、祈りとは自分の願いが叶うことではなく、**神の御心**になることだからです。御心が天で行われているように、地でも行われるようにと祈ることです。もちろん、**神**はご自身の栄光の富をもって、私たちの必要をすべて満たしていただきますが、私たちは、私たちの願いではなく、あなたの御心になるようにと祈られた**イエス様**のように祈らなければなりません。これが祈りの神髄です。

私たちの願いを祈ることも良いことです。**イエス様**は、あなたの些細なことにも関心を持っておられます。だから必要なことを祈るということは大切なことですが、もっと大切なことは、私の願うようにではなく、あなたの御心の通りにしてくださいと祈ることなのです。**イエス様**が望まれることは、私たちのベストだからです。であるとしたら、**イエス様**はベスト以下の何ものも与えないはずで、すなわち、**イエス様**があなたに与えようとしておられるのは何かを知ることはもっと良い事であり、素晴らしいことなのです。あなたが祈っても与えられないとしたら、それが**イエス様**の御心であり、あなたにとってのベストであるかもしれません。であれば、今まではあれもほしいこれもほしいと、与えられないことをひがんでみたり、ねたんだりしていたものを、祈っても与えられないことでこれが**イエス様**からの答えだということがわかれば、私たちは平安を持つことができるからです。だから、**イエス様**に祈ること、**イエス様**に願うことは重要で、私たちのからだの中にある欲望に対処する大切なステップです。

詩篇 34 篇 9～10 節には、「**【主】を恐れよ。主の聖徒たちよ。主を恐れる者には乏しいことがないからだ。若い獅子も乏しくなり飢える。しかし【主】を求める者は良いものに何一つ欠けることがない。若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を訪ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。**」とあります。主を訪ね求める者には、良いものに何一つ欠けることはありません。そう信じて**神**に向かい、**神**に願うなら、**神**はあなたに良いもので満たしてくださるのです。6 節に「**神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる**と。」とあります。本当に何かが、あなたのために必要だとなれば、**神**はそのことを心に留めて、手を貸してくださることでしょう。

4. 神に敵対する者

4 節に「**節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。**」とあります。この節にある「**節操のない者たち。**」という表現がありますが、旧約聖書の預言者たちはイスラエルの民が**神**に対して「**不貞**」であることを厳しく叱責しました。イスラエルの民は「**神の民**」という重要な地位を与えられていたにもかかわらず、**神**が彼らと結んでくださった契約を一方的に破棄したからです。エレミヤ書 3 章 1 節に「**もし、人が自分の妻を去らせ、彼女が彼のもとを去って、ほかの男のものになったら、この人は再び先の妻のもとに戻るだろうか。そのような地は大いに汚れていないだろうか。あなたは、多くの愛人と淫行を行って、しかも、わたしのところに帰るといふのか。—【主】のことば—**」とあります。このようにしてイスラエルの民は時と場合に応じて様々な国々と契約を結ぶことによって幾度となく主なる**神**を捨ててきたのです。

マルコの福音書 8 章 38 節に「**だれでも、このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。**」とあります。この**イエス様**の厳しい言葉は、主に対するイスラエルの民の不貞行為に関係しています。**イエス様**の時代のユダヤ人社会において離婚が特別に多かったというわけではありませんが、多くの人々が離婚したのも確かです。当時のユダヤ教の専門家であるラビたちによる恣意的な律法解釈が離婚を正当化していたからです。ここで**イエス様**はイスラエルの民が主との契約を一方的に破棄して「**離婚**」するという罪深さに陥っていることを指摘しています。**神**との契約を破棄することは、**神**が遣わした**救い主**を捨てることにもなります。そして、ヤコブは新約の民である**キリスト者**も旧約のイスラエルの民と同様に「**不貞**」の問題と無関係ではないことを強調します。他の一般の人々ばかりではなく**キリスト者**もまた、**神**に敵対する諸力やこの世や悪魔さえも行動を共にする「**契約**」を結んでしまう誘惑を、過去も今も受け続けてきました。しかし、**キリスト者**は同時に二人の主人に仕えることはできません（マタイの福音書 6 章 24 節）。そのような真似をすれば、ちゃんと前に進むことができなくなるからです。にもかかわらず、多くの人はそのような生き方を選んでいようにも見えます。

旧約の民も預言者エリヤから次のような二者択一を迫られた時に黙り込みました。列王記第一 18 章 20～21 節で「**そこ**

で、アハブはイスラエルのすべての人々に使者を遣わして、預言者たちをカルメル山に集めた。エリヤは皆の前に進み出て言った。「おまえたちは、いつまで、どっちつかずによろめいているのか。もし【主】が神であれば、主に従い、もしバアルが神であれば、バアルに従え。」しかし、民は一言も彼に答えなかった。」とあります。あなたは、いかがでしょうか。

5. 正しさ

ヤコブは、伝えようとする考えの正しさを二つの引用によって強調しています。一つ目は、5 節です。「**それとも、聖書は意味もなく語っていると思いますか。「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。」**」この言葉はゼカリヤ書 1 章 14 節の御言葉の引用です。ゼカリヤ書では、「**私と話していた御使いは私に言った。「叫んで言え。『万軍の【主】はこう言われる。わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。』**」とありますが、ここでは、「**神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。**」になっています。どちらにも共通していることは、神は「**ねたまれる方**」であるということです。

神の民であるイスラエルが自分以外の偶像に走って行ったら、神はどのような思いを持たれるでしょうか。「ねたみ」です。本当に愛しているから「ねたむ」のです。神は私たちが救い主イエス・キリストを信じた時、私たちにご自分の御霊を与えてくださいました。私たちは福音を聞きそれを信じたことで、新しく生まれ変わりました。神の子として、天の御国を受け継ぐ者とされたのです。その保証として神は、ご自身の御霊を与えてくださいました。それは、私たちがやがて天の御国を受け継ぐことの保証でもあります。それまでの間、神の御霊が私たちの中に住んでくださり、イエス様を信じるように導き、神を愛することができるように助けてくださいます。本当に罪に汚れた者を聖めてくださり、キリストのご性質にあずかる者としてくださり、この地上にあってキリストの栄光を現すことができるようにしてくださるのです。それなのに、まことの神以外のものを愛するとしたら、神の敵であるこの世を愛するとしたら、神がどれほど「ねたまれる」でしょう。神は昔エルサレムとシオンとを「ねたむ」ほど激しく愛したように、今は私たちの中に住んでおられる神の御霊を、「ねたむ」ほど慕っておられるのです。

二つ目は、箴言 3 章 34 節からのものです。6 節「**神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる**」と。それで、こう言われています。「**神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。**」ここでは、「**それで、こう言われています。**」が強調されています。たとえ私たちが、神が用意しておられるベストを受けそこなっても、世の友となって神の敵となってしまう、それで終わりではありません。それでも、神の「**恵み**」は尽きることはありません。いや、「**神は、さらに豊かな恵み**」を与えてくださいます。これは福音なのです。本当に私たちは愚かな者です。自分では神に従っているようにもいつの間にかこの世の友となることがあります。しかし、神はそんな者さえも憐れんでくださり、「**さらに豊かな恵み**」を与えてくださいます。ローマ 5 章 20 節には、「**律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。**」とあります。それじゃ、もっと罪を行おうということではありません。私たちは罪を犯さずには生きていけないほど愚かな者なのです。どこまでも自分中心で、貪欲の塊でしかありません。にもかかわらず神は、そんな私たちを赦し「**恵み**」を注いでくださいます。

でから、こう言われるのです。「**神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。**」どうしたら「**恵み**」を受けられるのでしょうか。へりくだることです。イザヤ書 66 章 2 節には「**これらすべては、わたしの手が造った。それで、これらすべては存在するのだ。—【主】のことは—わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の碎かれた者、わたしのことばにおののく者だ。**」とあります。神が目を留められる者はどういう人でしょうか。へりくだって心碎かれ、神の言葉におののく者です。高ぶっている人は神に向かいません。神に頼らなくても、神に祈らなくてもやっていると自覚しているからです。そのような人は神の「**恵み**」を受けることはできないのです。

私たちも、私たちのからだの中にはまだ古い性質が残っていて神の御心よりも自分の意志を通そうとして、それが原因で争いや戦いを引き起こすことがあります。そのような者をも愛し、赦してくださるイエス様の御前にへりくだり、イエス様ご自身を求めましょう。イエス様の言葉におののく者でありたいと思います。それこそ、私たちのからだの中で戦い欲望に打ち勝つ最大の力なのです。